

春を待つ植物たち

小川洋子（八千代市）

日 時：2019年2月3日（日）10:30～12:00 天候：晴れ

参加者：11名（大人10名 子ども1名）

担当指導員：佐野由輝 小川洋子、参加指導員：岡田敬子、萩將勝、晝間初枝

観察会の2月3日は節分、うららかな日和に恵まれた。この日のテーマは「春を待つ植物たち」だ。冬の寒い時期、自ら動くことのできない植物はどのようにして冬を乗り切るのだろうか、その工夫を観察した。

入口広場のコナラ、この時期は葉を落として一見枯れ木のような。しかし枝の先端に大きな冬芽（頂芽）があり、春には一気に伸びる。その大事な芽を何枚もの芽鱗（冬芽を保護する覆い）で寒さから守っている。一方イヌシデやムクノキは同じ落葉樹でも枝の先端にある冬芽（仮頂芽）も枝の途中の冬芽（側芽）も小さめで春になるとゆっくり少しずつ伸びてゆく。ムクノキの側芽には万が一に備えて予備芽がある。ムクノキの冬芽を覆う芽鱗の数は少ないなど木によって冬を越す戦略が異なるのを観察できた。

それでは常緑樹はどうだろうか。雑木林のシラカシやシロダモを見てみた。これらの木にも冬芽はちゃんとあり、枝の芽鱗の痕を数えると成長過程がわかり葉の年齢もわかることを話した。一方落葉樹のニガキの冬芽は裸芽、この状態で冬を越す。ニガキの葉痕が見やすい眼の高さにあったのでじっくり観察できた。葉痕にある目鼻のように見えるのは維管束の痕だ。ニガキだけでなく葉痕の維管束は円にはならないで途切れている。これが円だと茎で、葉柄と茎の痕の違いを維管束の形から認識できた。これら冬芽



は寒くなってから準備するのではなく夏くらいから徐々に養分を蓄え冬に備えている。

田んぼの畔ではオオバコやハハコグサなどロゼットの観察をした。他の植物が枯れ地表から姿を消した冬、地面にピッタリ張り付き寒さから身を守り、葉をいっぱい広げて太陽を効率よく浴びて生き抜く工夫をしている。オオイヌノフグリはもう花をつけ、春が近いのを皆で感じた。

斜面林のコバノガマズミ（写真上）を観察すると、冬芽の「芽ぐむ」「芽吹く」「芽立つ」という各段階の様子が見られた。もう間もなく開きそうな花芽に「可愛い」という声が飛んだ。

一見何もないような冬だが、芽だけでも着物を着ているもの、裸のものなど工夫があり、植物の知恵、個性の違いにも気づいてもらえた。



まとめに『徒然草』の一節を紹介